

ロンドン・オリンピック—1

2012年8月4日現在、ロンドン・オリンピックで日本中がはしゃいでいる、その割りにかつては金メダルの宝庫であった柔道・体操などが霞んでしまって金メダルはわずかに2個。関係者はがっかりよりもその言い訳をどうしようかと日夜考えているだろう。国から（すなわち税金）大金を援助してもらいながら不甲斐ない成績しか残せなかったのだ。しかし正直な所、なんの興味もない。大金を使って指導強化にあたってきたはずが、この体たらくである。（後述）

今面白いのはサッカーである。男女ともに快進撃で、ベスト4に男女ともに残っているのは日本だけである。女性の方は昨年ワールドカップで優勝し、国民栄誉賞をもらったし、澤選手はバロンドール（MVP;最も価値ある選手）にも輝いているから、ある意味順当かもしれない。

ところが男子の方は話が異なる。初戦の相手は、優勝候補筆頭のスペインである。前回のワールドカップ優勝メンバーも何人かいる。予選全敗もあり得ると考えられていた。まさかの勝利で、「ロンドンの奇跡」とまで言われている。スペインは、日本を舐めていた。だから俊足永井を前線で好きなように走らせた。永井はスピードに恵まれているが、決定力はない。現にスペイン戦では少なくとも2点を獲っていなければならなかったが、どちらもわずかのところではずした。チャンスメーカーとしてなら一流だろう。スペイン戦でもモロッコ戦でも得点したのは無人のゴールである。つまり、キーパーが飛び出さなければならぬような絶妙のパスをだした清武のおかげである。……だから永井は所属チームでも控えだし、オリンピックでも控えであったが、前日の練習でもものすごく調子がよかったので先発メンバーになった。結果的にはこれが奏功した。高校生で50メートルを5秒8で走るなら、100メートルでは10秒5に相当する（手動計時）。日本でもトップクラスだろう。あのウサイン・ボルトの50メートルは5秒5である。その後の加速で9秒6（電気計時：手動よりも0秒4か5遅いタイムになる）になる。だから20メートルとか30メートル走なら勝つだろう。

サッカーはいくらチャンスを作っても、たとえば100回チャンスがあっても

得点できなければ、0 対 1 で負けるかもしれない競技である。そのために 11 人のそれぞれ特徴のある選手がいるのであって、2011 年の最高殊勲選手 (MVP: バロンドール) に輝いたメッシが 11 人いても試合には勝てない、と言われるのである。

ボクの中では MVP は清武である。アシストのパスをさせてもシュートをさせても守備をさせても一流である。フリーキックも蹴ることができるし、アイデアも豊かである。これほどサッカー・センスに恵まれた選手も珍しい。ザックローニが、若手の中からイの一番にフル代表に招聘した。まあ、ザック好みの選手ではある。……この清武でさえ、香川がいるときには控えて、レギュラーになれなかったという。

以前から感じていたことであるが、得点した選手ばかりを称賛するのがマスメディアの特徴である。(だから彼らのセンスのなさを嗤うのであるが。) しかし、守備で、この選手がいなければ確実に 1 点入っていたという状況では、そのシュートを阻止したことは 1 点獲ったのと同じだけの価値があるはずである。同じ程度の称賛が与えられてもいいはずである。先日の試合でも、キーパーはともかく、守備の吉田なども同じように称賛をうけるべきだ。

このことは、野球においても同様である。ホームランとかヒットなど得点につながるプレーに対して MVP が与えられたりする。日本の野球ではとくにそうである。……何年前だったか、大リーグのオールスター戦で、MVP を獲得したのは、外野からホームベースまで矢のような送球で得点を阻止した選手であった。日本でもこれを手本にするかと思えばまったくそのような動きはない。

だから、サッカーにおいても得点した選手を称賛するとともに、得点を阻止した選手にも同等の評価をするべきであって、MVP はどちらでもいいではないか。サッカーには、MVP とは別に、得点王や得点を援助したアシスト王も存在するのである。

さきに、柔道は日本から始まったから「お家芸」といわれ、男女ともに殆どの階級で優勝し金メダルを獲得してきた。ソウル五輪でも惨敗だったが、今回

はさらにひどい。……今の柔道は、かつての柔道とは質が異なっているのを指導者たちが気づいていないのである。立ち技ばかりの稽古をし、寝技の稽古をさせない。選手もまた苦しいからしない。小手先の技を、選手の好みの技を稽古させるのみである。それでは最早勝つことはできないだろう。

今までのところ、「鬼のような形相をした」女の子だけが優勝した。「気迫の勝利」というが、気力だけでは勝てない。技術が伴わなければ勝てるはずがない。(以前高校野球で、アナウンサーが、「なんとか気力で打てないものでしょうか？」解説者が冷たく言い放つ。「気力だけでは打てませんね」)……見た目の怖さを競っているのではない。この女性は、「勝つ」ことに執念を燃やしていただだけである。

重量級の試合など、まさに木村政彦が指摘した「豚のやる柔道」である。木村の努力を仄聞するわれわれから見れば、負けてばかりの現在の選手たちを見れば、当然といえば当然の結果なのである。せめて木村の100分の1ほどの努力をしたら？

さらに、代表を選考する過程で、陸連がマラソン代表を選考するのと同じような不透明なことをしてきたからである。全日本大会で優勝しても、「海外での経験がない」などと、世間知らずの裁判官のような屁理屈をこねて代表に選ばなかった。それでは、この選手はいくら強くても、いくら勝っても、半永久的に代表になれないことになる。で、代表になった選手が優勝するかといえばそうでもない。そんなバカな話があるか！

2012.08.05.